

初期認知症高齢者における自己-アイデンティティの側面からの検討-

Self in early stage dementia: from the viewpoint of identity

研究代表者 原田 宗忠 (D3)

教員 伊藤 良子

研究分担者 西田 麻衣子 (D1) 本多 沙希 (M2) 芝池 有紀 (M2)

久保田 昌子 (M1)

〔研究目的〕

これまで認知症では病識を欠くと考えられていたため、患者がどのようなことに困るかに焦点が当てられる事は少なかった。しかし近年、初期認知症患者が病気に伴う困難さを認識し (Clare, 2003), 不安を抱きながらも自己やアイデンティティを守ろうと苦慮していることが明らかになってきている (Bender & Cheston, 1997)。だが、初期認知症患者が守ろうとしている自己やアイデンティティは、自己やアイデンティティの構成要素のどの側面なのかについては、現在のところ明らかではない。

初期認知症患者が自己やアイデンティティのどの側面を失う不安を持つかを明らかにすることは、患者の望むケアを明らかにし、介護の方向付けを可能に示る点で意義があると思われる。よって本研究では、初期認知症患者の不安についての語りを分析することで、自己やアイデンティティのどの側面で不安を抱くのかを明らかにすることを目的とした。

〔研究経過〕

まず、研究にあたっては、本学以外から医学、社会福祉学、看護学といった多領域に渡るメンバーを招き、共同で研究を行い、本研究結果が各臨床現場において活きるよう工夫を行った。そして、各メンバーによって先行研究のレビューを行った。

その後、物忘れ外来に通院し、MMSE18点以上でアルツハイマー型認知症と診断された初期認知症患者に対し、「最近何か困っていること、気にかかることはありますか」という言葉かけからインタビューを行い、初期認知症患者の語りを収集した。その後インタビュー記録を、研究メンバーがKJ法を参考にしながらカテゴリが抽出され、アイデンティティの観点よりカテゴリが検討された。そして、抽出されたカテゴリから、初

期認知症高齢者がどのようなアイデンティティの側面において不安を抱くのかを明らかにした。

そして、本研究で得られた結果を第8回認知症ケア学会において発表をし、再度研究手法や研究結果について検討を行った。その結果、アイデンティティ研究の観点からカテゴリを検討するよりも、James (1890) に始まる self の観点から検討する方が適切であると思われた。従って、KJ法で抽出されたカテゴリをJamesのselfの観点から検討しなおした。

〔研究成果〕

本研究結果は、第8回認知症ケア学会大会で発表された（原田宗忠・西田麻衣子・山田裕子・国立淳子・杉原百合子・武地一（2007） 初期認知症患者の不安と自己の側面. 第8回認知症ケア学会プログラム・抄録集, p.300.）。

なお、本研究には、研究代表者、研究分担者の他に、山田裕子（同志社大学社会学部）、武地一、国立淳子（ともに京都大学附属病院老年内科）、杉原百合子（同志社大学大学院総合政策科学研究科）、笹倉尚子（京都大学教育学研究科 D1）、林明日香（京都大学教育学研究科 M2）が研究メンバーとして参加した。